

開催報告

春学期FDプログラム

「学生の考えにつながるレポート課題の設計：生成AI時代にも有効な『問い』や課題の出し方」

[2026年7月17日]

大学教育開発・支援センターでは、生成AIの普及を受け、大学の授業において広く用いられてきた評価方法の一つであるレポート課題の設計方法について改めて理解を深め、見直す機会を提供することを目的に、春学期FDプログラム「学生の考えにつながるレポート課題の設計：生成AI時代にも有効な『問い』や課題の出し方」をオンライン開催しました。講師には、大学でのレポート課題の設計に関する著作を多数刊行され、近年は生成AI時代におけるレポート課題の工夫について精力的にご講演されている成瀬尚志先生（大阪成蹊大学経営学部教授）をお招きしました。当日は、96名の方々にご参加いただきました。



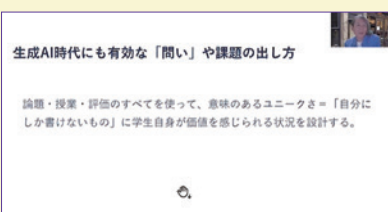
成瀬尚志先生

ご講演では、まず生成AIの登場によってレポート課題による評価の妥当性が揺らぐようになった背景が解説されました。生成AIの登場によって、学生は従来のレポート課題で向き合う必要のあった「書く困難」を経ずとも課題を完成させられるようになりました。その結果、レポート課題を課し、学生に深く考えるように理想の状態を要求したとしても、それが必ずしも学生の思考につながるわけではないという難しさが生まれるようになりました。成瀬先生からは、教員側の問いかけの対象や仕方自体を工夫することで、学生の思考を促すことの重要性が示されました。

では、学生の思考を促す問いかけを設定するには、どのような工夫が必要なのでしょう。成瀬先生からは、「意見を述べよ」のように特定の指示や条件を満たすだけで「完了」してしまう問いではなく、学生が試行錯誤を経ながら自分の判断で「達成」できるような問いを提示することの重要性が語られました。その具体的な手法として、知識の修得と学生の独自性がバランスよく反映される「シーソー論題」という課題の設計方法をご提案いただきました。

一方で、論題を変えるだけでは十分でないことも注意点としてあげられ、学生が課題を「達成」できるようにするためのプロセスを授業全体に組み込むことの重要性が強調されました。

学生が知識を修得し、自分なりの考えを生み出せるよう、成瀬先生が実際にに行っている授業設計の工夫についてもご紹介いただきました。



▲ご講演の様子

プログラム終盤では、参加者から事前に寄せられた、学生の思考を促すレポート課題の設計方法、生成AIの使用有無に影響されない公平な評価の方法、生成AIの禁止と活用のバランスに関する質問にご回答いただきました。最後にまとめとして、論題、評価、そして授業のすべてを活用し、知識を修得しながら自分なりの考えを形成すること自体に学生自身が価値を感じられるよう設計することが大切であると締めくくられました。終了後のアンケートでは、自らの授業における問いかけの仕方や授業の組み立てを見直す機会となったといった旨の感想が寄せられました。

本プログラムは、生成AIの登場によりその妥当性が問われ始めているレポート課題の現状を出発点に、学生の思考を深める論題設定や評価方法、さらには授業全体の設計に至るまで、実践的な工夫を学ぶ貴重な機会となりました。ご登壇いただいた成瀬先生、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教 豊田 英嗣

次ページ 「実践紹介 学生の生成AI利用に対する教員の向き合い方」

当センターからのお知らせ＜本学教職員向け＞

●「生成系をはじめとするAIの利活用に関する情報」サイト

教職員向けコンテンツにて、授業における生成AIの利用方針とその教育上の意図について、本学教員にお伺いしたインタビューを公開しています（本学教職員限定）。ぜひご覧ください。
<https://s.rikkyo.ac.jp/7sbk3a2w>

●大学教育開発・支援センター蔵書の閲覧・貸し出し

大学教育開発・支援センターでは、高等教育や大学教育等に関連する書籍・刊行物（約4,000冊）を所蔵しています。センターの開室時間に閲覧いただけるほか、貸出も行っています（本学教職員限定）。蔵書一覧や手続きは、RIKKYO PORTAL上の大学教育開発・支援センターのページをご確認ください。
<https://portal.rikkyo.ac.jp/cdshe>



学生の生成AI利用に対する教員の向き合い方 — レポート課題や論文指導に着目して —

生成AIの進化に伴い、学生の学修における生成AI利用が一般化する中、多くの大学教員が文章執筆場面での生成AI利用に問題意識を有しています。本特集では、生成AI時代であるからこそ／であっても修得されるべき知識・技能を踏まえ、レポート課題を設定されている先生方に、レポート課題の教育上の意図、学生への方針の共有について伺いました。

著者としての責任と探究の価値を学生自身に手放させないために

森 聡美教授（異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科）



「基礎演習A」の概要

開講年度・学期	2026年度春学期	設置学部	異文化コミュニケーション学部
配当年次	1年生	履修者数	約24名
授業形式	対面（池袋キャンパス）／演習・ゼミ		
授業の目標と内容	課題テキストの読解、少人数でのグループディスカッション、発表、レポート作成を通じ、論理的思考をはじめとする、大学で学ぶための基礎となる力を向上させる。		

「専門演習1～3」の概要

開講年度・学期	2026年度春学期・秋学期	設置学部	異文化コミュニケーション学部
配当年次	3年生・4年生	履修者数	各学年約10名
授業形式	対面（池袋キャンパス）／演習・ゼミ		
授業の目標と内容	卒業研究の成果物の作成に向け、バイリンガルの言語発達と言語使用ならびに認知・心理・学習面の特徴等の研究領域の知識を扱いながら、自ら設定したテーマについて調査研究を行う。		

生成AIに自分自身が置き換えられてはならない

—生成AIの普及に伴い学生の書く力に変化はありますか。

森：学生の文章が整い、読みやすくなったと感じています。学生の間では、生成AIを使って書くことが当たり前になっているのだと思います。私は生成AIの利用が一概に悪いものとは考えていません。既にインターネット環境がインフラとして普及している中、今後は生成AIとともに書くことが当たり前になり、一人で書く必要がなくなるかもしれません。本来身に付けるべき力が損なわれず、人に相談するようなかたちで上手く使えるのであれば、使用を妨げるものではないと考えています。

—生成AIに依存せず、身に付けてほしい力がありますか。

森：論の展開や構成を考えることです。文章の全体の構成についても、一つのパラグラフ内の展開についても、論じるための構成を考える部分は生成AIに任せないでほしいと思っています。論の展開や構成は自身の思考そのものなので、それを任せるとオリジナリティがなくなってしまうのではないかと思います。

また、問いを立てる力も身に付けてほしいと考えています。論文を執筆する際には、テーマに関する知識を十分に得た上で、当該テーマにおける既存の問題を認識し、問いを立てる必要があります。授業で課すレポートでも卒業研究でも、いずれのレベルでも求められる力であり、卒業研究に取り組む段階で困らないよう、レポート課題を通じて段階的に指導する必要があると認識し

ています。さらに、立てた問いを検証するための適切なデータや資料を集める力も必要です。数値データを集める、文献から該当する記述を収集する、あるいは自身で調査データを集める等、様々な方法の中から自身の問いに合うデータや資料の収集の方法を選択し、独自の根拠をもって主張を支える力です。

文章執筆における生成AIの利用を一概に禁止するものではないという考えではありますが、生成AIに構想の段階から肩代わりしてもらうかたちで文章を書き続けた場合、上述した力が身に付くのかは疑問に思います。生成AIへ依存した状態は、自身で文章を産出するための認知プロセスが働いていない状態ではないかと思います。自分で文章を産出する力がなければ、生成AIの出力の良し悪しの確認もできないのではないかと考えます。極端な話ではありますが、例えば、課題をそのまま生成AIに入力してその出力を提出し、良い評価が与えられるとします。もしこうした状態が継続すると、学生は大学で学ぶ機会を失ってしまうのではないかと、という危機感があります。あくまで自身の学修の伴走者として生成AIがある状態が望ましいのではないかと考えています。「あなた自身が置き換えられてはならない」というメッセージを学生に伝えつつ、生成AIの利用を許可する範囲については、試行錯誤を続けています。

著者としての責任を育てる授業の工夫

—学生にはどのような方針を伝えていますか。

森：複数教員が共通シラバスで担当している「基礎演習」（春、秋）では、1年生の段階から、学問的誠実性を取り扱い、特に

剽窃が不正であることを徹底的に指導します。基礎演習ではレポートを1学期に3回ほど提出する必要があります。レポートの度に、引用情報を示さないことは他者の考えの盗用・剽窃であること、自説と他者の発言を区別して引用することを学部全体で強調しています。また、以下は教員の裁量で行っている部分ですが、生成 AI が登場してからは、その出力を精査せずそのまま使用し剽窃になっていたら、それは著者であるあなた自身の責任であるということを伝えるようにしています。また、Turnitin を活用し、プライバシー保護には配慮しながら、学生が類似性判定を確認できる設定とし、適切な引用の範囲を越えていないかを学生自身に確認させています。

卒業研究の指導を行う「専門演習」や講義科目では、生成 AI の利用は認めるけれども、誤字脱字や文のねじれ等の修正といった文章の校正、ブレインストーミング時の相談に留めるよう指導しています。具体的には、Cambridge University Press の AI 研究倫理方針^{注1)} に準拠し、生成 AI を利用した場合にはそれを開示すること、剽窃は行わないこと、生成 AI は責任著者にはなりえないこと等を伝えています。生成 AI が引用文献を付した出力をすることもあります、その出力に誤りが含まれる場合や、剽窃がある場合、原則は筆者が全て責任を負うため、自分自身で確認し考えるよう伝えています。

—責任を持って書く力の育成に向け、どのような工夫をしていますか。

森：「基礎演習」では、複数回のレポート執筆とその後の指導とピアリーディングを行うことで、文献の引用を含むレポートを書く上で重要な点について指導、かつ学生が自ら認識できるよう工夫をしています。毎回のレポート課題において、そのレポートを振り返りながら、文章表現、パラグラフライティング、引用等の指導を行います。その後、学生間でそのレポートのピアリーディングを行います。ピアリーディングにあたっては、授業内で指導した事項と対応するレポートを評価するための着眼点をまとめた評価シートを渡します。学生は相手のレポートが評価シートの観点に即しているかを確認するとともに、相手のレポートの文章中にコメントも付します。さらに学生同士で口頭でもフィードバックを行う時間を取ります。評価者として正しく評価ができるということは、自分がレポートを書くときにその意識を持ち込んで書けることです。ピアリーディングは文章を書く際のメタ意識を鍛えるトレーニングの一部であると考えており、授業内で指導した観点を評価者として実践で用いながら体得できるよう工夫しています。このような指導法は私個人が開発したものではなく、これまでの担当教員全員で方針を検討し実践してきたものです。評価シートも学部の教員が開発したシートを共通で使用しています。

「専門演習」では、卒業研究執筆の各段階に沿い、細切れに指導を行います。研究計画を立てる、あるいは各章を書く段階において、まずはアウトラインを、次に本文をというかたちで段階的に締め切りを設定し、フィードバックも挟み3学期間（1年半）をかけて書きます。各学期の中間と期末には、内容の発表も行います。先行研究の文献レビューは最も生成 AI を使用しやすい

箇所だと認識していますが、それについてもアウトラインを書かせた上で、発表の中でそれを説明できる状態にあるかを確認しています。卒業研究で取り組むような何万字/ワードもある文章、かつデータ分析を伴う研究に一貫性を持たせるには、全てを生成 AI に頼るわけにはいかないだろうと思います。最終的な執筆段階ではピアリーディングも行っていきます。

その他の講義科目のリアクションペーパーや課題では、授業中に行ったグループディスカッションの議論を含めて書くように指示したり、簡単なデータ収集とその分析について報告をさせたり、生成 AI には知りえない、作成しえない素材を含めて書かせる設計にしています。例えば、複数言語使用について知り合いに簡単なインタビューを行い、その結果を授業で紹介した概念を用いて整理し、分析せよ、という課題を出しました。

自分にとって探究の価値がある問いを見つける

—レポートへの生成 AI 対策の一つに、筆記試験への代替があります。筆記試験では失われるものはありますか。

森：あると思います。インターネット環境を想定すれば一部可能かもしれませんが、従来の筆記試験では、文献から情報を集め、適切に引用をしながら批判的に論じる力を測ることは難しいのではないかと思います。筆記試験は長くて 100 分程度ですから、レポートで課しているような、数千字/ワードの文章を書くことを通して論旨や構成について慎重に検討し、まとめあげる力を養うことも難しいかと思います。また、主に卒業研究で求められる、探究する力の醸成の機会でしょうか。自分でテーマを決め、問いを立て、その問いに対応する文献やデータを集め、集めたデータに基づき主張や仮説について吟味する一連の過程です。本学部は卒業研究が学修の集大成であるため、探究に基づくレポートの執筆を積み重ねていくことが重要だと考えています。

—問いを立てることは生成 AI に任せやすい行為でもあります、学生には問いを立てることで何を期待していますか。

森：確かに生成 AI は、何らかの研究領域でまだ問われていない課題を上手く見つけることは得意かもしれません。けれども、それが自分の興味と合致するかは別の問題です。学生にとって探究する価値がある問いであるか否かは、最終的には本人の価値観と興味にかかってきます。学生には是非、自分の興味のある部分で問いを見つけてほしいと考えています。

自分の興味は最終的には自分にしか分かりませんが、ある程度個人の関心に合致する問いを立てることは、現在の生成 AI で既にできるのかもしれませんが、また、学生の生成 AI 利用を今後も完全にコントロールすることはできないだろうと思います。インタビューでお話をする中で、まずは本人の意思に任せて使わせてみて、最終的には自分が主導で、自分で確認をしないと上手くいかないことを学生に身をもって体験してもらえないのではないか、と考えました。

―卒業研究では、自分の関心を探究し続ける力の育成も、目的の一つなのですね。

森：おっしゃる通りだと思います。自分の関心を知ること、そしてそれを発信する力を育てることはこれからも大切にしたいと思っています。最後は自分の興味関心に従って方向性を定め考えなければ、論文は書けないかと思っています。学生には自分らしさ

とプライドを持っていてほしいと思っています。

注 1) Cambridge University Press. Publishing Ethics.
<https://www.cambridge.org/core/services/publishing-ethics/authorship-and-contributorship-journals#ai-contributions-to-research-content>.
(アクセス日：2026-08-06)。

学生は学問的誠実性の涵養の途上、研究上の利用と教育目的の利用との線引きを

和田 亨教授 (理学部化学科)



「化学実験 B」の概要

開講年度・学期	2026年度春学期	設置学部	理学部
配当年次	2年生	履修者数	約70名
授業形式	対面（池袋キャンパス）／実験		
授業の目標と内容	合成実験（有機化学・無機化学）および測定・計算実験（物理化学・分析化学・計算化学）を行い、実験操作やデータ解析、レポートのまとめ方等の基礎について学ぶ。また、責任ある実験・研究活動を行うために、倫理・行動規範や安全管理等についても学ぶ。		

実験レポートの個別面談で安易な生成AI利用を防ぐ

―生成 AI の普及に伴い、学生のレポートや書く力に変化はありますか。

和田：この数年で特別に書く力が低下したという実感はありません。個人的な印象としては、生成AIよりもむしろ、SNS等のメッセージ送信を主とするアプリケーションの影響のほうが大きいと感じています。学生は非常に短い文章でやり取りすることに慣れており、日常のコミュニケーションの感覚でレポートを作成するため、主語や目的語が欠けた文章が提出されることが多くあります。化学科では実験科目でレポートを課しており、レポートには実験手順を記載する必要があります。例えば「AをBに加える」と、「BをAに加える」ことは異なり、正確に記述しなければ実際の手続きとは異なることを意味してしまいます。手続き文を正確に書けないことは生成AIの登場以前からの課題であり、現時点では生成AIの直接的な影響を測りかねています。

―学生に身に付けてほしい書くことに関わる力は、生成AIの登場以前と変わっていない、ということでしょうか。

和田：はい。以前から一貫して正確に情報を伝達する力を身に付けてほしいと考えています。当たり前でできることだと思われがちですが、実は決して容易なことではありません。

―「化学実験」では、レポート課題をどのように課していますか。

和田：理学部化学科では実験科目が豊富にあり、一つの実験

が終わる度、およそ2週間に1度は実験レポートの提出が求められます。実験終了後、結果や考察を含めたレポートを提出してもらいます。このレポート課題は、何らかの問いを出し、それに対する論述を求めるものではありません。実験レポートでは、イントロダクションを省略しているものの、基本的に国際学術雑誌の標準フォーマットに準じ、アブストラクト（あるいは目的）、実験、結果、考察、結論、引用文献という構成で、実験結果を報告することを求めます。また、「数字と単位の間には半角スペースを空ける」等の細かい体裁まで確認します。表記のルールを厳格に守ることは、意味を固定し情報を正確に伝えるために極めて重要だからです。1年生の段階から、一意に伝わる文章を書くことを強調しています。

また、レポートは提出して終わりではありません。教員が採点してコメントを記入し、その後、学生と一対一で約30分間の個別面談を行います。「ここは何を意味しようとして書いたのか」等、一つずつ確認し、合格するまで書き直しを求める指導を20年ほど続けています。「化学実験」は複数教員で担当をされており、実験の種類ごとに担当教員が変わる形式です。実験科目の履修者は70~80名です。私が現在担当している実験は教員2名体制ですので、教員1名あたり40名弱の学生を受け持ちます。面談前の事前のレポートの読み込みにも、学生1人あたり30分から1時間ほどを費やしています。提出後の面談をはじめとする手厚いフィードバックが、AIの安易な利用を一定程度未然に防ぐ、歯止めとして機能しています。

―授業を設計する際、レポート課題と筆記試験はどのように使い分けていますか。

和田：学部の授業では、実験科目以外では基本的に筆記試験

の計算問題や記述問題で評価しており、レポート試験はほとんどありません。レポートを課すことがあるのは主に大学院の授業です。文系の学部とは状況が異なる部分があるかもしれませんが、私は理学部の教育を、大学院前期課程までの6年間を一区切りとして考えています。化学の世界は進展が速く、新しい理論や測定方法が次々に登場するため、研究活動の前提・常識として理解しなければならない知識が増えていきます。学部の段階では、大学院での研究に進むための必須知識を確実に修得してもらうため、筆記試験で評価します。一方、研究室での実験が主となる大学院では、自身の研究分野とは異なる領域であっても、授業で学んだ理論や新しい研究手法を自分の研究に活かし、幅を広げてほしいと考えています。授業はそのきっかけになれば、という意図で行っているため、レポートを課すことがあります。

何を書くべきか、何を評価するかを明確に伝える

ー「化学実験」のレポート課題の出題で工夫している点がありますか。

和田：学生がレポートに書く内容を迷わないよう、授業中に入念な誘導をしています。私は化合物を合成する実験を主として担当していますが、測定が終わった段階ですぐにデータを計算させ、サンプルを持参させて報告に来させます。その場で学生と数値を見ながら、データから読み取れること、例えばなぜ収率が低いのか、原因は何であるかを対話します。この議論をまとめれば優れたレポートが書ける段階まで学生を導いています。

また、実験の記録を行う「実験ノート」を作成させ、実験前には実験手順をまとめたフローチャートをこの実験ノートに書き提出することを求めます。その際、実験に関わる基礎知識の理解を測る事前課題を出すこともあります。これらは実験前にTA（ティーチング・アシスタント）が一人ひとり確認し、間違っている箇所には修正を入れて実験に臨ませています。ここまで徹底的に教員やTAが手をかけており、また、学生側も書くことが明確に分かっているため、学生自身が生成AIの必要性をあまり感じていないように思います。ただし、この教育体制は大教室の講義科目では不可能です。学科の教員全員が何らかの形で関わる実験科目だからこそ実現しています。

ーレポートはどのような点を重視して評価していますか。

和田：授業の配当年次で評価の重点を変えています。1年生は論文の構成に従ったレポート作成が初めてであるため、体裁と日本語表現を重視し、フォーマットや表記ルールに従い、実験で行ったことを正確に書けているかを評価します。2年生以降は論理的な考察ができているか、オリジナリティのある考察か等、中身に関わる評価観点を加えます。例えば、収率低下の原因を突き止めるため、反応条件を変えた追加実験の提案等が含まれていれば加点します。評価において重視する点や配点の方法（何を基礎項目とし、何を加点項目とするか）は学生に事前に伝えています。

さらに学生にはレポートを自己点検するための「レポートチェックシート」を配付しています。アブストラクト、実験方法、という構成要素ごとにチェック項目を設けており、その項目の条件を満たしていないと減点されます。チェックシートは、レポートのWordテンプレートの2ページ目に組み込み、点検した上でレポートと一緒に提出することを義務付けています。書く内容を明確にすることと同様に、評価についても事前に学生に伝え、その通りに評価を行っています。

研究上の利用と教育上の利用の線引きを

ーレポートの出題にあたり生成AIの使い方に関する指針は提示しましたか。

和田：これまでは生成AIに関する方針を明確に示していませんでしたが、今後は授業資料に記載したいと考えています。授業では、生成AIを使用した量ではなく、使い方が重要であると考えており、使い方自体の是非を明示する予定です。例えば、生成AIの利用を明示せず、生成AIが出力した文章をコピーして提出する行為は、先輩の過去のレポートをあたかも自分が書いたかのように提出する行為と同じであり、剽窃とみなしています。このように研究不正に該当する使い方は明確に禁止する方針です。

使い方が重要だと思うのは、研究で利用をして良い範囲と、授業で利用をして良い範囲は明確に異なると考えているからです。例えば、海外の学術雑誌への論文投稿にあたり、専門の業者に英文校正を依頼することがあります。校正を依頼した場合は論文にその旨を明記することが求められます。生成AIの登場以後は、校正業者に依頼する代わりに、生成AIにその役割を任せることがあります。研究者の論文はその内容が評価されますから、校正業者や生成AIを利用したことを明示すれば、そのような利用は問題がないかと思います。この研究上の利用の仕方をそのまま教育にも適用するのであれば、レポートの表現の校正は生成AIの利用を許可してよい部分かもしれません。しかし授業では、学生が文章を書けるようになることも大きな目的としています。研究者として校正業者や生成AIに校正を任せられるのは、英語を書く技能が一定程度あり、校正後の文章が書きたいことと対応しているかを判断し、必要に応じて修正することができるからです。自分で書ける技能を養うことが授業の目的であるならば、書くべき事象と表現が食い違っている際に違和感を持つことができない、すなわち書く技能が未熟なうちに、生成AIを使わせてはならないのではないかと考えています。授業の目的が何であるかによって、利用の範囲は異なると考えます。

研究上の利用については、MOVE 第30号の特集^{注1)}で箕浦真生教授（理学部化学科、副総長）が挙げられている、学問的誠実性が指針になるのだと思います。科学・研究の世界は信頼で成り立っており、もし生成AIを巧妙に使用してデータを捏造した研究が蔓延すれば、科学コミュニティ自体が崩壊します。生成AIを仮に使用するのであれば、科学への誠実さを持った上での利用でなくてはなりません。けれども、このような倫

理観は簡単に身に付くものではなく、学生は授業の中でその倫理観を身に付ける途上にあります。倫理観が未熟なうちは、悪意がなくともデータの誤った解釈等を行ってしまう可能性があります。これは生成 AI に限った話ではなく、例えば新たな測定方法が開発されたとき、原理や意味を理解せず方法だけ利用して論文化すると、データの解釈を間違えることがあり得ます。道具を使うのであれば、自身の研究に関わる基礎的な知識を理解し、基礎能力を高めた上でなくてはなりません。

一誠実であるためには、態度だけではなくそれに見合った技能が必要ということでしょうか。

和田：その通りです。気持ちの問題ではなく、育てるべき技能があり、それを育成するには時間がかかります。繰り返しくなりませんが、研究と授業とでは使用可能な範囲が明確に異なります。この授業が何を学び身に付けるものであるかという目的

と、そのために生成 AI をどこまで使用してよいのか、どこからはいけないのかという線引きを説明する必要があります。このとき、単に利用の範囲をルールとして示すのではなく、制限がある理由をきちんと理解してもらうことが重要だと考えています。「赤信号だから止まれ」と教えるのではなく、「なぜ赤信号で止まらなければならないのか」という理由を理解してもらうのです。非常に巧妙に AI を使われた場合は見破ることができませんので、最終的には学生との信頼関係に頼るほかありませんが、だからこそ、事前に目的と利用の範囲を説明しておくことが重要だと思います。

注1) MOVE 第30号の特集記事は、座談会「大学で学ぶこと、大学で教えること、その姿勢を考える」

インタビュアー：助教 名倉 早都季、豊田 英嗣

インタビューまとめ：助教 名倉 早都季

新・センター長あいさつ

当センターでは 2026 年 4 月にセンター長が交代しました。以下に、新・センター長からのメッセージをお届けします。

大学教育開発・支援センター長

高林 陽展 (文学部教授)



2026 年 4 月 1 日に、大学教育開発・支援センター長を拝命しました文学部史学科の高林陽展です。

私は、学部時代から本学文学部で西洋史をまなび、2004 年にロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンに留学するまでに大学院・文学研究科史学専攻にも所属しました。

博士号を取得し帰国した後は、日本国内の複数の大学で勤務し、2017 年 4 月 1 日に本学文学部に着任しました。長年学んできた立教大学の教育に携わるようになったことをうれしく思うと同時に、身の引き締まる思いを抱いたことを覚えています。

2018 年 4 月からは本センターの TL (Teaching & Learning) 部会センター員に着任し、その後も通算で 5 年間センター員を務め、2024～2025 年度には副センター長兼 TL 部会長を務めてきました。

この期間に大学教育は大きな変化を経験してきました。ICT ツールの発展、コロナ禍のもとでの「オンライン授業」の展開、近年は「生成系 AI」との向き合い方等、教育の質をいかにして担保するかという課題に矢継ぎ早に取り組む日々が続きました。

こうした諸課題は、まさに本センターの目的とかかわるものです。本センターは、本学の教育の改革及び改善を支援し、その充実及び高度化に資することを目的とした全学的な組織です。その際、本学全体の教育の質をいかに高めるのかというマクロの問題に取り組むのはもちろんのことですが、各学部・研究科・諸課程等それぞれで展開されている一つ一つの授業の質をどのように上げてゆくのかというミクロな課題も見据えなければなりません。変化する社会情勢を見て将来的な展望を描きつつ、学内のマクロとミクロの双方の次元から教育の質を改善する。なかなか困難なミッションですが、「自由の学府」をうたう立教大学であればこそその教員の自主性や専門性を踏まえて活動してゆきたいと考えております。

編

集

後

記

今号では、文章の執筆という場面に着目し、2 名の先生に学生の生成 AI 利用に対する向き合い方をお伺いしました。生成 AI に思考や執筆を容易に代替させることができる (正確にはそのように見える) 中で、自分で書く楽しさをどう伝えていくのが問われているのだと感じました。そして楽しさには少なくとも、自分が書きたいことを追究する面白さと、書いては消して書き換えるそのプロセスの中にある、書くことそれ自体の楽しさという 2 種類があるように思います。本記事が生成 AI と書くことの関わりを考える一助となれば幸いです。(名倉)

「MOVE 第36号」

立教大学 大学教育開発・支援センター TL 部会 ニュースレター

2026 年 9 月 25 日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター TL 部会

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

Tel: 03-3985-4624 Fax: 03-3985-4615

E-mail: cdshe@rikkyo.ac.jp

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>

